

# 瀬戸内文学と『とはすかたり』

——付、杉本苑子『新とはすかたり』——

（承前）

町田 栄

## 要 旨

本稿は、平成三年三月十五日発行『跡見学園女子大学紀要』第二十四号に掲載したものに続く。  
なお、その題名「瀬戸内文学と『とはすかたり』——付・杉本苑子『新とはすかたり』——」を表記の通りに改題する。

三

昭和四十四年五月号『随筆サンケイ』（第16巻第5号）は、誌上に、いささか古色をたたえた「さすらい人生」なる小特集を組む。これに四氏が寄稿して応えている。

すなわち川村晃『さまよえるオランダ人』、谷内六郎『海とぬりえ』、久里洋二『蒸発して犯罪者になろう』、および、瀬戸内晴美の『放浪について』である。通覧するに、まず、瀬戸内文が異質とも映るだろう。軽妙な戯文、才筆を揮ったものではない。「さすらい」を「放浪」に言いかえて、金的を射止めた誠実な文章だ。前記三氏は、各種の「さすらい」体験を、あるいは荒唐な夢をなつかしく、多少の苦味をこめ、はすかに構えて物語ってみる。難問、もしかすると奇問に類する課題「特集・さすらい人生」の強いた、少しぎこちない執筆姿勢かもしれない。瀬戸内文のみ免れている。川村氏の題名は、作曲家ワーグナーの歌劇『さまよえるオランダ人』による。しかも、「さまよえるユダヤ人」を踏まえないでもない。

雑誌編集部意図した「さすらい人生」とは、おそらく、旅をやつした企画であろう。洒落であった。付度したり、穿鑿したり、そんなことは無用だ。そうでなければ、時代錯誤もはなはだしい。「さすらい」という語に、ほとんど現代性はない。死語に瀕している。たとえば、田中小実昌『きょうがきのうに』（平元・一二・四刊 読売新聞社）に描かれる時空間の漂流とも違う。

かりそめに、「さすらふ」を尋ねれば、離京から追放、流刑、左遷、失踪、落伍など不遇、失意の情態が思い浮かぶ。が、その好適な用例を『蜻蛉日記』中巻（『日本古典文学大系』20 土左・かげろふ・和泉式部・更級）昭三二・一二・五刊 岩波）に見る。ふつう、藤原道綱「鷹を放つ」という、小見出しの付けられた一節である。

ころは天禄元（九七〇）年六月、道綱十六歳は前年八月に童殿上して参内、奉仕し、元服も翌々月に控えてはいる。しかし、筆者三十四、五歳は懊悩にたえない。わが子のたどる行方にも「さすらい人生」を案じて、現実には杞憂にすぎなかったが、苦衷をもらしてしまふ。夫、藤原兼家の扱いに満たされず、どうしても愛を信頼できないからだ。全巻中に、屈指の哀切深い名場面であろう。

つくぐとおもひつゞくることは、なをいかにこゝろとしてしにもしにしがなと思ふよりほかのこともなきを、たゞこのひとりある人をおもふにぞ、いとかなしき。人となして、うしろやすからん女などにあづけてこそ、しにも心やすからんと思ひしか。いかなるこゝちして、さすらへんずらんと思ふに、なをいとしにがたし。

「いかゞはせん、かたちをかへて、世を思ひはなるやと、心みんとかたらへば、まだふかくもあらぬなれど、いみじうさくりもよ、となきて、「さなりたまはば、まろも法師になりてこそあらめ、なにせんには、世にもまじろはん」とて、いみじくよ、となけば、我もえせきあえねど、（注、傍点は町田）

悩み、もだえた果てに決意した死、唯一、残された死についても、

あれもこれも思い尽くしたものの、「たゞこのひとりある」道綱ゆえに留まらねばならぬ。母子の関係が、最後の絆だ。自分の死後、ひとり子が「いかなるこゝち」で、「さすらい人生」を歩むことかと思ひやるに堪えきれぬ。せめて、わずかに生を保って、「かたちをかへて、世を思ひはなるやと、心みん」。道綱も同調する。狂おしいまでに執着心の深いこの女性は、かえって男女の愛欲も、母子の愛執も放下、解脱しようと希求したのだ。「さすらい人生」を選択する。兼家の愛護が信じられぬとする以上、母子の「さすらい人生」は必至だろう。

「世」に捨てられたという母と子とは、逆に、「世」を捨て去ろうとわかる。母の「世を思ひはなるや」と、子の「なにせむにかは、世にもまじろはん」との間には、世代の微妙な差異、推移を横たえていよう。客観的に、『蜻蛉日記』の筆者はともかく、道綱の方は決して「世」に捨てられてはいない。いわば、そのはるかな先きに、「世」に捨てられずとも、みずから進んで出離を求めようとする、中世にいたる。前提条件の有無が、ひとつ、平安期と中世とを分けるのか。行動的な仏道帰依が自己救済の新生活を拓く。

なるほど、「さすらい」には当てどなき、寄るべなきといった情調を伴う。が、悲涼感にばかり閉ざされてはいるまい。ふたつをそれぞれ、旅の目的地、経済基盤のなさに局限できないだろう。時空を超えてついに終わるともない、自力をもってしか叶わぬ我執の浄化、諦観悟達の求道性を体しているようだ。住すれば執すで一所不住と、悉皆捨てきって、捨身にも通じる遊行の修行であろう。積極的な剛毅な別面は看過できな

い。もとより、「さくりもよ、となく」ものではなくなる。

ひとり氏の『放浪について』が、「特集・さすらい人生」に真つ向から報いていよう。正統なものだ。諧謔を弄さず、機略も巧緻もこらさぬ。けれん味もない。ただ、題名通りに真情を吐露している。

——後年、総題に採用して、単行本を編んでいる。あの艶冶な随筆集『放浪について』（昭四七・二・二八刊 講談社）である。さらに、これを講談社文庫におさめる時（昭五〇・一・一五刊）に、かなり長文の『すててこそ』を書き下ろし、巻末に増補する。さながら、全編の（あとがき）を呈してしめくくる。「得度一周年記念」日にあたり、前年、昭和四十八年十一月十四日の得度より現在にいたる一年間を回顧したのである。執筆時は明らかだ。すべてを「すててこそ」、真に「死をくぐりぬけて再生しえた自得」を述べている。

日付の上で直後に、全六巻の随筆選集の各月出版（昭五〇・一・三〇、六・三〇刊 河出書房新社）が始まる。その第一回の、標題も『瀬戸内晴美随筆選集六宗教・すててこそ』（昭五〇・一・三〇刊）に、また、いずれにも『すててこそ』を収載していない。同巻に収録しているのは『放浪について』である。

氏は、どうしても『すててこそ』を随筆集『放浪について』中に、幸便にも文庫本刊行に際会して、編入したかった。この随筆集に固執した『すててこそ』であったのだ。なぜとは説いていない。

ふたつの同題随筆集の刊行は、時間的に、氏の得度、修行を中にはさんで、その前後を至近距離でさし渡す。短い架橋だ。標題作『放浪につ

いて』が枢要となろう。『すててこそ』は、『放浪について』を照準した書き下ろしであった。両文はたがいに呼応する。

短文『放浪について』は、「さすらい人生」への憧れを卒直に語っている。次の部分が一編の核心であろう。

出家遁世と放浪は、いまや私のもっとも深い憧れとなって日夜、心をそそのかしてくる。現在の私は、家はあっても家庭はなく、肉親で私の袖を引きとめる人間もない。しかし、心に繋る別れがたく断ちがたい愛欲の絆はないこともない。その絆に未練があつて、思うままの憧れの遂行ができないでいるものの、その絆の強さゆえに、また、放浪への憧れもまた日々強力になりまざる。

四十七歳にして「出家遁世と放浪」への希求を告白しているのだ。氏の「さすらい人生」は、『蜻蛉日記』の「かたちをかへて、世を思ひはなる」にとどいている。身軽な旅へのあこがれなどではない。

もともと、易者に「性、放浪の星の下」に生まれついでると占われ、大いに我が意をえたという。氏の移動は転々して、その跡がとどまらぬ。県立徳島高女時代の二十日間朝鮮、満州の修学旅行、東京女子大に学び、帰郷して結婚、中国北京に渡り出産し、終戦で引き揚げ、徳島から上京、京都へ出奔、離婚、上京、幾度とない都内の転居、「ラジオ商殺し」事件の支援に徳島行を繰り返えし、一ヶ月間のソ連旅行、同ヨーロッパ旅行など。

現況は東京の高級アパートと京都の自邸とを往復する生活だ。著述の席が暖まる暇もあるまい。「芸術家は本来、放浪の本性を持つことが第

一条件」と自覚して、それを実践して来た。

「風に背を押されながら、次の町へ、次の村へと歩いていく。その放浪感」に心安らぐという。目的の地があるのやら、ないのやら、点と点をたどる移動に意味があるらしい。放浪者に足跡は残らぬ。かき消えてしまふようだ。旅と仮寓、転居を二十六、七回も重ねた志賀直哉の、尾道に、城崎に、松江に、赤城に、我孫子に、そのほかの地に、何んと確かな足跡をそこに刻みつけていることか。

右の得度、出離のあこがれを吐いて四年半の後に、それを現実に果たす。素志を抱き続けて、熟成の期間を十分に費やしてはいる。無理のない、自然の帰結を招来したのではあろう。しかし、こう言っただけでは、隔たるふたつの時点を描すのみで、予告から実現への内実は何ら充填されぬ。なぜにこの時点に、僧籍に入ったか、明らかにならぬ。——『すててこそ』は、往年の『放浪について』に出発した、「出家遁世と放浪」実現の事後報告であり、その定着をみた後日談である。同題隨筆集の中に、是非とも補われなければならなかった。『すててこそ』は空白期の経過を語っていない。私見では、氏の『とはすかたり』滞留がそこを満たす。

「出家遁世と放浪」へのあこがれは、やはり『とはすかたり』享受のもと、それに触発されて、口を衝いて出たものである。すでに、引用文は氏自身の意思でありながら、『とはすかたり』巻一、二、三に、折節に当ってもらす後深草院一条の情態にひとしい。ふたりはたがいに、同質の我が身を認め合うだろう。

つづけて、次のようにも言っている。引用しないではいられぬ。

恩愛の薄い者が、肉親や愛欲を捨てやすいのではなくて、私にはむしろ、情の深く、恩愛に執着心の人一倍強い者こそが、その息苦しさの反動から、いきなり、自分の心臓を突き刺すような荒療治に出してしまって、気づいたときは、もうすでに、すべてを投げうち、放浪の途上にあるのではないかと思う。

は、寸分たがわず、『とはすかたり』巻四、五の拳に及んだ二条の性行にかなう。

巻四の尼僧二条（法名不明）は、冒頭、鎌倉下りの途上に立つ。四年の間隙において、巻三末部に継続していない。唐突の感はまぬがれぬ。

実際、前半部の宮廷篇（二条の四歳から二十八歳）と、後半部の放浪篇（三十二歳から四十九歳）とをつなぐ連結器がない。そこに欠巻を指摘する説もある。前掲、富倉本も同様だ。巻四の「補注」に、宮廷生活を捨てて尼僧に変貌した、「経緯についての記事は欠脱したもの」と説く。しかも、『増鏡』との関連上、その「二条（三条と改称している）」記載を本来は『とはすかたり』にあったものと推測する。ほかに、巻三と「巻四の間にあるべき出家の記事等も本来書かれていた」といって、それらの散佚を認めるのである。

氏の、右の言々を二条理解とすると、空白部は埋められよう。氏は欠巻を仮定するまい。要さぬ。「いきなり、自分の心臓を突き刺すような荒療治に出してしまって」とは至言だ。二条の性情に照らして、やすやすと越えてしまう。が、氏自身の実際問題としては、衝動的な出離など不

可能だ。流行作家の山積する執筆の契約がはばむ。

もとより、二条を寓して書いた文章ではあるまい。氏はおのれを語って、おのずと血脈の人に通ってしまったのだ。わたくしは、ふたつの引用文を氏の『とはすかたり』注として読み、ひそかに学恩を蒙っている。しかし、文中には『とはすかたり』について、いっさい口をつぐむ。

多くの人物を取りあげて論じながらも、なかに、後深草院二条を入れぬ。それを訝しく思うのだ。ほとんど喉もとにまで浮んで来て、封緘するらしい。それをせんさくし、憶測をめぐらせたいのだ。『とはすかたり』を読了して驚嘆し、折りから作品化の構想を養っているらしい氏が、古典最大の「出家遁世と放浪」を描いた、この女流文学を閉却するはずがない。ことさらに、口を押さえたかと猜せられる。強情な隠し立ては、また、その理由も隠していよう。黙秘を問わねばならぬ。

氏は「四十を越えたいま」、突然、浮き世の縁を自分から断ち切って、放浪にあこがれ出た「人びと」に共感を寄せるようになった、という。契機はいわぬ。かつて、「縁側に幼い児を足蹴にして、泣きすぎる妻をふり払」って家を出た西行は好きになれず、釈迦の出離も「お妃や王子がかわいそう」に思われたという、記憶を持つ氏である。新たに訪れた心境を、「思いもかけなかった」ともいう。内心の変化に不審を禁じえない。しかし、それは払拭できぬ。これらについても、なぜかを言わぬ。

芭蕉を挙げて、「生涯を美しく羨ましく」思うが、臨終に「弟子どもが取り囲んでいる図は氣にくわない」。放浪者は「ひっそりと、誰にも

看とられず、死んでいってこそ、その淋しい強さがまっとうされる」とするからだ。小野小町、和泉式部、清少納言は晩年、「落ちぶれた放浪の旅に果てたらしい」。その「女の放浪が何とじめじめして美しくないことか。惨めたらしい彼女らの放浪は、乞食の旅であって、哲学がない」と。罵詈に類しよう。『煩惱夢幻』の作者がいうことばであろうか。同情、憐憫のかけらもない。何かが憑いて、氏をして言わしめているようだ。二条尼の大規模な放浪は零落し、絶望したためではない。みずから選んだものだ。潔い。「他人の目には何の不自由もなく見える、時を得顔の人間が、ある日、突然、すべてを捨てさって、放浪の旅を選ぶ。その瞬間の、きびしい美しさ」を保持してしよう。

もしかすると、氏は「出家遁世と放浪」に向って恣意な、不当な夢を結んでいるのかも知れぬ。文学的イメージなり、先入観なりが作用している。一見して、氏のあこがれに切実感がなく、小説家の美的ロマンチズム、その発露ともいえそうだ。

毀貶に偏ったことばは、後年、自身が得度、出離を体験した後に改められる。落差ははなはだしい。過酷な評言は、そのころ放浪者、出離者たちの胸裡に思っていたらぬ、未熟な言であったに違いない。先の「哲学」の語に留意すれば、『私の好きな古典の女』（昭五七・二・一五刊 福武書店）に、和泉式部に「捨身行のようなきびしい美しさ」を看取し、「透徹した寂しさや孤独感」を再評価している。種々の男性遍歴も、そのままに人生放浪へ通じる。

『比叡』（昭五四・三・二〇刊 新潮社）に、

終日、雪の戸のかけで昔の遁世者の書き残したものを読み暮している俊瑛の耳に、これまで聞えなかった彼等の肉声が聞えてくるような気のある日がつづいた。西行、一遍、兼好、長明、そして後深草院二条……。どの出離者にも共通なのは揃って孤独な魂を抱いていることと、はためには誰も出家の必然性が思い当たらないことであつた。／「生ぜしもひとりなり、死するも独なり、されば人と共に住するも独なり、そひはつべき人なき故なり」／という一遍の法語にめぐりあつた時、俊瑛は出離以来こぼしたことの無い涙を、とめどなくあふれさせていた。

主人公の俗名俊子、法名俊瑛はわが心から得度して、初めて、出離した遠い先人たちの「肉声」に触れる。「はため」にはうかがい知れぬものが「聞えて」来たのである。「出家遁世と放浪」に確たる、具体的な事情、理由がわかる訳ではない、人間存在の孤独性に目覚め、それに徹するより他にない「人びと」であつた。氏も覚醒して出離し、出離に身をゆだねた「人びと」の前に、ようやく推参できる。認識者であるよりは体験者たる、氏の資質が発揮されていよう。『比叡』中に、もっとも精彩を放つのは、主人公が得度式に臨み、受戒、剃髪に及ぶ場面である。「すべてを捨てさって、放浪の旅を選ぶ。その瞬間の、きびしい美しさ」を体現していよう。以前、胸中に思い描いたロマンチズムは、ここに現実化されたのだ。

さらに進んで、最近作『花に問え』（平四・六・二五刊 中央公論社）に達すると、氏の一遍智真への傾倒、親炙がモチーフになって仮構化され

る。国宝の絵巻物や古文書などを手がける、有能な修復師「亮介」は、最後の三年間を「一遍上人絵伝」の模写に没頭し、主人公「わたし」を一遍の教えに誘う。生前、右の一遍法語をつぶやく、「亮介のその姿はまさしく孤独一の肅条とした一本の立木のように見えた」という。峻烈であるが、痛ましい孤絶感、凄絶感はない。「生ぜしもひとりなり」の前文は、「万事にいろはず、一切を捨離して孤独一なるを死するといふなり」である。捨離、孤独に徹してゆるぎない。

この亮介が、「一遍がもとは自分の妾だった超一という尼と旅をつづけているんだけど、尼僧になったままで、関係がつづいていたのかどうか、この間から考えていたんだ（略）／わからない……どっちでもいいことだけど……でもどっちでもいいことでもないと思うし」という。韜晦ではない。妄語でもあるまい。小説『花に問え』の著者「瀬戸内寂聴」師は、何んとも束縛、拘泥のない自在境に飛翔してしまったことか。孤独者とは煩惱を切り放ち、かくも解脱してしまう自由人なのか。往昔というべきだろう、例の『放浪について』には、一遍智真の遊行を指して、それは次のように記されてあった。

一遍上人が家を捨て伊予を出るとき、二人の愛妾がいたのが、ただちに剃髪して後にしたがつたといわれている。一遍の遊行はいさぎよいけれど、後を追った二人の尼の純情はべとつきすぎて私はいやだ。かくて性愛をともした女二人につきまとわかれての放浪は、風もなまぐさく一遍もやりきれなかったのではあるまいか。

彼我、見識の懸隔は測れまい。別次元に属するだろう。俗人と自己練

成を積んだ出離者との、絶対的な相違である。氏が不明で、未熟だったのだ。右の露骨な不快感、嫌悪感は浴びせた途端に、我が身に返ってくる。我が身を苛む。尼僧に向けて辛い。この随筆の末尾は、「私も何歳になったらこのもろもろの生活の垢をかき落とし、ひとり漂泊の旅に出て、行きてかえらぬ旅ができるのであろうかと、わが身のまわりの人間臭さのみつめ直さずにはいられない」と。氏は、はるかかなたの旅路に第一歩を踏み出したのである。

ついに、後深草院二条を明記せぬ。しかし、『放浪について』は『とはすかたり』を内臓し、それに促された執筆であった。なおも長く続く固執を考え合わせると、当時、氏は自身の『とはすかたり』受容を十全のものとしなかったらしい。この晦渋な古典に、富倉本の説に疑義が、反発が、不承知が、理解を越えるところがあったようだ。それは『煩惱夢幻』の作家には、宮廷愛欲篇にあるより、「出家遁世と放浪」の後半部にあつたろう。少くとも、そのように考えられていたに違いない。結果的に、不明点の解法は、体験主義的者にとって自己発明の途上にしかなかった。二条という女性は蠱惑的だが、そこに陶醉や安住を決して許さない。妙に挑発的な棘をもって、読者を刺し、突き放す。毒をもつとも嚙るのは同質、等身大の女性理解者ではあろう。

『放浪について』一編は、『祇園女御』序章の階梯から一段と深まって、『とはすかたり』核心部参入を始める、その更新を身をもって暗示する。はやくも半歳の後に、『婦人生活』誌に『とわずがたり』を連載しはじめる。氏の、自筆『解説（十二）』（『瀬戸内晴美長編選集』第十二巻 昭

四九・一一・二〇刊 講談社 月報所収)に「この作者と作品が好きになっただけに、すでに二度も、現代語訳を試みている」という、最初のそれに該当する。

三年前に『祇園女御』の序章「その後の世に」で、長文の紹介、解説、解説、要約を行なった。それも、客観的な叙述ではなく、原典巻一・二・三を現代語で物語り、その世界を多少なりと再構築していた。発表紙面で十回分、単行本で十一ページ、講談社文庫本(上下、昭五〇・九・一五刊、一〇・一五刊)では十八ページを占める長さである。分量と叙述法を見れば、氏の『とはすかたり』作品化は、すでにある程度、緒についていたのだ。試行である。

「二度も、現代語訳を試み」に少しく立ちどまりたい。いささか、実情にそぐわぬ言い方だからである。当『とはすかたり』は、後年の『現代語訳とわすがたり』に照らしてみれば、とうてい、「現代語訳」というに当らない。作家の創意が働き、再編成がほどこされている。主人公「私」の波乱に富んだ生涯が立体的に、いきいきと語られている。毎月、毎回魅力的な章名を付して、とかく拡散しがちな原典を刈りこみ、まとめ、ポイントをつないで物語を展開する。叙述に焦点は結ばれよう。程度の差、規模の差こそあれ、『祇園女御』序章も同様であった。

「現代語訳」には、しかし、『とはすかたり』が優れた物語構造をそなえ、スケールも大きいので、これに即した叙述を守る限り、いかに取捨しても原典に及ばぬと、謙辞をこめたかも知れない。現代語のリライトであった。原典にしくものはない、というのか。広義の、氏の「現代

語訳」を借りると、これは二度目の現代語訳となろう。三、回目が厳密な、部分的に抄訳もあるが、唯一の『現代語訳とわすがたり』となるだろう。もとより、氏は『祇園女御』序章を数えていない。主題、趣旨が違うからである。

言ってみれば、今回の『とはすかたり』を、後年の『現代語訳とわすがたり』とともに別枠に扱ったのである。区別したのだ。『とはすかたり』は『祇園女御』序章に、『放浪について』のあこがれに接続しない。年来の積み重ねの上に載っていない。孤立している。そこに、当『とはすかたり』の意味があるだろう。

十二回(昭四五・一〜一二「婦人生活」)の連載開始をひかえ、前月号誌に「作者のことば」(昭四四・一二・一発行、第23巻第16号)を書いている。次に抄出してみる。

(略) そうした平安朝の女流の才能の開華が中世にも伝わり、残りました。そのひとつのあらわれとして、とわすがたりがあげられます。とわすがたりは、後深草院二条という女性の手記、あるいは一種の色ざんげといったものです。彼女は、久我家の出で、十四の時、後深草上皇の寵を受け、その皇子までも生みましたが、その後運命にほんろうされ、上皇に愛を捧げ乍らも数々の男性との情事に流されていきます。／晩年は出家して女西行のように全国の旅に暮らし、若い日の恋の想い出を大胆赤裸々に書き残しました。今の時代に読んでも二条の女としてのなげきや愛や、喜びはいきいきと伝わります。私は二条の女らしさが好きです。その卒直さ、その才能が好き



です。(略) どうか私と共に、二条のあわれにはなやかな色ざんげに耳をかたむけて下さいませよう。

『とわすがたり』執筆の意図は、素朴な「二条のあわれにはなやかな色ざんげに耳をかたむけ」る点にある。『煩惱夢幻』の尾をひく、虚心な態度であろう。「晩年は女西行」のように放浪したと、原典巻四・五も視野に入れてはいる。が、希薄だ。告白体の懺悔録と確言するにはためらわれた。前半部を偏重して作品化する。出家、放浪はつけ足しにいっただけであった。いまだ、氏が「面白さは、前半、二条の青春時代の華やかな宮廷色模様のところ、後半の尼になってからの女西行ぶりは退屈である」(『黒髪と藤の花』、昭四六・七『風景』)と信じていた時期にある。

濃密な愛欲秘図をくりひろげる、語り口は清新でみずみずしい。再度の作品化が疑われるほど初心である。さすがに執筆がこわばったり、渋滞したりしない。のびやかだ。原典の裡に溺没し、たっぷり堪能しているかに見えるが、実は成心を去り、冷静に節度を保つ。錯雑した原典の整理、解説も行きとどいていよう。仮構も創設している。

全容はふたつの太く、長い縦糸が平行して流れ、これが構想の骨組みだ。主人公と後深草院との交情であり、西園寺実兼とのそれとである。院にとって、二条はその母、故大納言典侍<sup>すけ</sup>ゆかりの人で、四歳の時に引き取って御所に住まわせておく。『源氏物語』の藤壺と若紫との物語になぞらえたものと知れる。他方、実兼とのゆかりは、「契りおきし心の末の変らずばひとり片敷け夜半の小衣」の贈歌、父久我大納言雅忠より

「つねに逢ひ見よ」と許され、託されたことば、「心のほかの新枕」の人(いずれも巻二)、「さしも新枕とも言ひぬべく、互<sup>かた</sup>みに浅からざりし志の人」(巻三)などと記される。原典でも具象化されぬ、暗示的な謎語だ。氏の創意はここに働く。主人公十二歳の「春の桜吹雪の午さがりの園」の密会、後深草院の目を盗むともない大胆な、交情のあり方を象徴する、——を仮構する。終生、陰に陽に、途絶えながらも継続する物心両面の庇護、罪の子の出産、スリルに満ちた密事を共有するふたりの深い、厚い宿縁である。

他は枝葉ともいえる挿話になるが、どれも異常で、妖美、凄艶で重い。ただし、前回とひとしく主人公の出家、放浪には冷淡だ。この点が大作『中世炎上』と分ける。『放浪について』の筆者は、原典の「出家遁世と放浪」の問題を回避した、おそらく保留したのであろう。原典前半部の学習をもっぱらにしたのだ。再出発である。自重、慎重な対処であろう。氏自身にさざした問題だからである。

出家遁世へのあこがれが衰えたわけではない。『とわすがたり』の連載中に、「浮世を離れ、自然の美しさの中にひたり、さて書くことは、うつとうなる<sup>マヤ</sup>ような華やかな心の中の夢をつづりたい」といい、「私は所詮遁世は出来ても出家は無理な人間のような気がする」(『残された夢』、昭四五・一〇『オール読物』)と。「出家遁世と放浪」の結実するまでには、消長があったらしい。その経路がゆるやかで、自然なものであったゆえんである。

『とはすかたり』学習は、第二の作品化をすませても、依然として続

く。後半部への関心は濃い。翌昭和四十六年に、八寫正治氏に「週に一回、『とはすがたり』の講義をしてもらっている。すると、この物語の生まれた背景である中世が、無限のひろがりをもって私に迫ってきた」〔徳島の人形廻し〕、昭四六・四・一五付『サンケイ』夕刊」という。桂宮本『とはすかたり』初版に接したのは、この時であろう。『解説』へ十二頁に言及がある。

当時、氏の抱いていた疑問は、具体的に、次のふたつに絞って設定できる。ともに、出離して久しい二条尼にあるまじき振舞いと見えたのであろうか。

- ・三十五歳の時、たまたま、旅の途上でめぐりあった後深草院との一夜のものがたりは怪しい色艶をたたえている
- ・四十七歳で院の死に逢った時の取乱しぶりや、はだして火葬場にかけてける情熱のほとばしりにも、悟りすました女西行の心の澄み方ほうかがえない

と。だから「二条という女の人間性」に惹かれる（『黒髪と藤の花』）。二点、八寫氏の回想（『解説』、『現代語訳とわすがたり』昭六三・三・二五刊新潮文庫 所収）と照応するからである。

巻四と五の中で名高いのは、八幡・伏見御所での院との再会と、院の病床を見舞い、葬儀を裸足で追う描写である。この書の全体を考える時、巻四・五最後のこの院との出会いを、構想上どのように解釈するかで、この書の主題把握は異なってくる。かつて、瀬戸内氏とこの書を勉強した時に、紀行部の後深草院との出会いに、肉体関

係を想定し、両者の関係をラクロ風な共犯関係として解釈した。そう解釈する時、紀行篇は全く不用となり、愛という主題で、この執筆動機不明な一書に、近代的解釈を与えた事になる。氏の小説『中世炎上』はその所産といえよう。

結論をいってしまえば、氏の寄せる疑問は、自身の「出家遁世と放浪」に入った後に、体験的な自得を待たねば解けなかった。自己発明である。従って、『中世炎上』の完稿、出版の後にも持ち越され、懸案が悟得された時、『とはすかたり』を卒業する。

#### 四

古典ものへ転回した『煩惱夢幻』の作家が、折りしも『とはすかたり』に遭遇し、後深草院二条におのれを見出して、いちずに傾斜を深めた道筋をたどり来ると、『中世炎上』（昭四六・一〇・一五）昭四七・一〇・二〇付『週刊朝日』に五四回連載）に到り着く。避けられぬ、多分に予定の行路であろう。前年、『とわすがたり』連載を終了した執筆者が原典の研究、学習を改めて行なうのは、それに満足しなかったからである。再度の作品化構想をしのばせていたからである。前掲、「この物語の生まれた背景である中世が、無限のひろがりをもって私に迫ったきた」は、後述するが、『中世炎上』連載予告のことばに通じる。

『中世炎上』の彼方に、といっても指呼の間に、自身の出家、得度が浮び上って、はつきり実体を顕す。もはや、『残された夢』にふともらした揺らぎ、ためらいはない。

昭和四十一年末にもよおした「心理的転機」に始まる、瀬戸内文学の

転換は『とはすかたり』連関によって指示、誘導され、助長されて頂点をきわめる。この過程の前半の期間が、『中世炎上』にとって、みずからの形成過程であった。すでに『とはすかたり』に言及し、かわる制作は多いが、いうまでもなく、『中世炎上』はこれを中心にした、大部な集成である。氏の出離へ向う行程上の、一里程碑にとどまらない。

決定したのだ。完成後にも視線を注ぐ。原典理解にこだわりを持っていたからである。そして出離者、放浪者ならではかなわぬ見直しを下す。あたかも、「出家遁世と放浪」の素懐を遂げた、二条尼その人の誘いに応えるように。二条の全体像は寂聴師によって理會され、代弁される。

また完全に氏の血肉となる。『とはすかたり』は晩年、老尼の執筆といわれるが、氏も同様に、得度以降も旺盛な筆力を揮っている。「王朝や中世には出家しても書いた女が多い。昭和の現在、ひとりの女の物かき、日本の文学の伝統にのっとって出家しても不思議でもないだろう」(前掲『わが文学の履歴』)。

『中世炎上』は、『祇園の女御』序章に語りおいた、子の行方物語ともいべきテーマを引き受けている。また、『放浪について』に語りおいた、「出家遁世と放浪」へのあこがれを引き受け、氏の内部において、それを自己検証する制作となる。この執筆こそ氏の出離、遁世、放浪の実践を目指し行く同伴者、証言者である。

この作品を解くに好適な、対照的な大作、杉本苑子氏の『新とはすかたり』(平二・三・二六刊 講談社)がある。比較して、『中世炎上』を見

なければなるまい。

もうひとつ、富岡多恵子氏の『とはすかたり』(平二・一・一六刊 講談社)もある。『中世炎上』にちなむ時、言うべきことは少ない。瀬戸内、杉本両氏の制作とは容貌も、位相も、角度も異なる。対置すらしない。

——全十二巻「古典の旅」シリーズの一本として書き下ろし、刊行された『とはすかたり』エッセイとも言えよう。古典の作品世界内を旅と見立て、直接には、筆者が舞台となった土地、場面をめぐり歩いて語る、自由な散策の随想である。前掲の適確な章名に見る通り、原典の物語を展開にあわせて、順序にダイジェストしながら通読する。暗示を廃した章名を拾うだけで、全編が判読できる。全五巻、それぞれに配分した章数にもうかがわれるように、各巻に対する目くばりは周到で、平等である。前後半部に軽重はつけない。

親しげな、明るく、繊細な、ときにユーモラスな口語体の語りは、いかにも巧妙だ。奥ゆきのある、行きとどいた解説、解説がなされている。しかし、何んとも端倪すべからざる文章だ。現代感覚あふれる語り口で、たとえば、二条は宮廷内の女房という「キャリア・ウーマン(仕事をもらった女性)」であり、「ホステス用のキモノ(女房としての仕事着)も自前で調」えなければならぬ、などという。これらのことは遣いが微塵の軽佻浮薄をいれないのは、氏の批評精神に裏づけられて、後深草院から公私ともに、使い勝手のいい二条が論じられているからである。七百年前の古典に、醒めた目は幻想を結ばぬらしい。作中に、さまざま

「虚構」を剔出して、そのリアリティを評価する。逆に、「素材の苦みがこたえられない料理」というような物言いもちりばめる。辛辣な鑑識力が魅力だろう。

巻四、五をさして富岡氏は「紀行篇」と称する。これが基本だ。二条の孤独に、老いゆく尼僧の宗教、信仰や流浪、零落、貧窮、はての衰亡があまり見えて来ない。旅行先にあつて、二条は「都びと」、それも際立つて高貴な「宮廷人」という、和歌その他の「教養」の持ち主という「ブランド」を「誇示」して、地方人に接する。「もてなしを受け一夜の宿を得るのは、(略)それは芸能者(あるいは放浪者)の生きる方法」という。原典末尾に近く、二条は熊野那智に籠つて写経、納経の供養につけても、親の「形見の残りを尽して、唱衣いしく」と嘗む志を、権現も納受し給ひけるにや」とあり、後深草院から拝領の「殊更残し持ちまゐらせたりつる御衣、いつまでかはと思ひまゐらせて、御布施に、泣くく取り出で侍り」と、これまた手放してしまう。氏の「それほどに彼女はモノをもたない尼さんになっているということですね」は、少しも足りぬ。ひたすらの棄捨行に、一所不住の遊行に徹した、それゆえに報われる優遇、冷遇という面が失なわれよう。

二条は「無念、理不尽、屈辱、不本意、性的奉仕者、被支配者」などに生きることを余儀なくした、という。富岡氏のメッセージであろう。瀬戸内、杉本両氏は、これほど冷たい批評的観点を立てない。中世において、前半生を宮廷内で、後半生は「出家遁世と放浪」に存分に生き切った女性である。

さて、瀬戸内氏は、『中世炎上』の長期連載に先き立って、前号誌(昭四六・一〇・八付『週刊朝日』第76巻第45号通巻二七五八号)に「作者のことば」を掲載する。次はその全文である。ひと通りでない抱負を開陳していよう。中世という、壮大なスケールをはらんだ時代相への関心は異様だ。『とはすかたり』を典拠とし、後深草院二条を主人公とする作品構想とは察知できまい。題名からも窺えぬ。暗示もしていない。前掲『婦人生活』誌上のそれとは対照的である。『煩惱夢幻』のそれは和泉式部を明かしていた。もちろん、作品予告で手の内を披瀝する必要はない。

日本の中世にいつ頃から惹かれはじめたのだろうか。／「一遍上人絵伝」や「絵師草子」にあらわれた中世庶民の生活の貧しく活力にみちた喜憂の騷や、「とはすかたり」に描かれた貴族たちの社会の爛熟と頹廢の土壤の上に咲く大輪の妖しい匂いを放つ情艶の花々。そして海の彼方からはモンゴルの嵐が吹きよせてくる未曾有の国難期。新しい時代の足音をそこに聞きながら、上も下も激情と咏嘆にゆれ動き、巷には争いがみち、宗教にあこがれ、人々はのがれられないこの世の業苦に生きながら世外の救いを需めて放下流浪の旅におもむく。中世と現代がいつからか、私の内部では二重写しになって重なり、やがてそれは炎々と燃え上がり、天地を朱に染める壮絶な映像を結んでくる。／はじめての「週刊朝日」の誌上で、私の中世の幻を力のかぎり書き尽してみたい。

中世に結ぶ幻影、夢幻を語ったのである。実作品の全面を覆うのは、

後深草二条の数奇な、振幅の大きい生涯である。「作者のことば」にそぐうまい。

では、虚言を記したのか。詐術を弄したのであろうか。誌上連載を終えて、単行本を刊行（昭四八・三・三〇刊 朝日新聞社）するとき、巻末に「この小説は『とはすかたり』を原典とし、作者の空想をくわえてつくったもの（以下略）」と付記している。当然ながら、作品内容にあてはまる。それは種あかしではあるまい。右の「作者のことば」と巻末付記とは食い違う。しかし、双方の間に、作家が制作の容量を盛りこんだことは確かだ。もくろんだ構想が、次第に狭くつぼまって来たのではない。作柄を見ても、形成過程から推しても、「中世炎上」は、当初から『とはすかたり』を「原典とし、作者の空想をつけ加えたもの」であることは動かない。

仮りに、もし言ってみれば、この「作者のことば」は杉本氏の「新とはすかたり」の方的中しよう。前掲、二著の章名群を照合するだけで、史的スケールの相違は歴然としている。

『新とはすかたり』はそう自称しながらも、原典は制作の有力な資料にすぎない。典拠というにはばかる。杉本氏は著書の「後書」で、「後深草院二条の回想録『とはすかたり』に拠っていますが、内容は、原典とだいぶ異なっています」と自注する。氏の意図したところは、——「鎌倉末から南北朝初頭にかけては、歴史小説不毛の世紀」と評するとき、必らずや、師の吉川英治『私本太平記』全十三卷（昭三四・三・二〇—三七・三・三〇刊 毎日新聞社）を念頭においてその前史、由来記、縁

起談を試みようとしたに他ならない。持明院、大覚寺の両統迭立は、後嵯峨院のわが子後深草院をうとんじて、次子龜山院を偏愛したという「皇室内部の『家庭の事情』に端を発し」、これが『私本太平記』の分裂、抗争を導引して来る。その初期の同時代史料が『とはすかたり』であったのだ。客観的な展望をもって臨み、位置づけている。

しかし、原典には「政治も軍事も、背景となった社会情勢」も描かれていない。「鎌倉幕府の内訌、たびかさなる元使の来朝、二度にわたる元軍の襲来、末世思想の瀰漫など世相は激しく揺れ動き、人心も安定を失って、迫りくる動乱期の予兆に怯」えている時代相も語られていない。氏は、これら歴史の種々相を組み合わせて、鎌倉中、末期をダイナミックに構築しようとする。真正面にすえて、「踊り念仏の集団をひきいて精力的に全国を布教して廻った一遍上人の存在と、二条の精神の再生を、重ね合」せる。二条の「出家遁世と放浪」の動機に、一遍智真への帰依を仮構してみせたのだ。

この歴史小説の主人公には、新時代人たる西園寺実兼を立てる。実兼は『徒然草』第百十八段に挿話が記録されているが、勅選和歌集に入集歌数の多い著名な歌人だ。わけても『続拾遺集』に十三首、『玉葉集』に六十二首、『続千載集』に五十一首は際立っている。「彼は清華の家に生まれ、最終的には太政大臣にまで昇りつめた権臣で、当然、朝廷の内情にくわしく、さらには関東申次という京と鎌倉のパイプ役をも兼ねていましたから、幕府との関りも深い人でした。しかも二条の恋人として、最後まで彼女の生の軌跡をあたたく見守りつづけています」。作品構

想は明らかだ。

いうまでもないが、「作者のことば」は瀬戸内氏の言である。『中世炎上』に時代相が皆無ではない。両統の皇位継承をめぐる悲喜、蒙古襲来による動揺、春日の神木入京、浅原為頼らの伏見帝殺害未遂事件、宮將軍惟康（後嵯峨院の孫）と久明親王（後深草院の第二皇子）との更迭事件、実兼の政界暗躍などが寸描されてはいる。いずれも、大作の仮構を支えるに足りぬ。『新とはすがたり』とは、作品構造の上で好一對をなす。

たとえば、第二章に立てた「ムクリとワクワク」は、交易商人の「唐物商の松若」を設定して、それを次のように説明させる。「もともとはムングリとか、モンゴルとかいったらしいですな。それが訛って、ムグリ、あるいはムクリとなったわけでしょう。日本だって、異国人の口にかかればワクワクですぜ」／（略）「むかし、日本のことを倭国やまとと言ったでしょ。そのワコクが訛ってワククとなり、ついにはワクワクなんて珍妙きてれつな名になったってことですよ。ムクリの国名を笑うわけにはいきませんな」。実兼の新知識獲得を仮構したのである。付け焼き刃の新知識は亀山帝に蒙古恐るべしと進言して、伊勢神宮に勅使を立てて、宸筆の宣命を奉獻し、国家安穩を祈願することになる。諷刺と戯画化がどこさされていよう。網野善彦氏の『日本の歴史10 蒙古襲来』（昭四九・九・二〇刊 小学館）には「蒙古の恐怖はたしかに対馬・吉岐・九州には深い爪跡をのこした。『ムクリコクリ』（蒙古・高麗）がくるというのは、長く子供を脅すことばだったという」とある。『中世炎上』では「蒙古」とルビを打つにとどまり、何らの仮構化をどこさぬ。

氏は「作者のことば」に、自作構想の一端をも洩らさない。ロマンチシズムであろうと、史的素描であろうと、まず「中世の幻」を語らねばならない。急務であった。その短い一時期を一身に集約し、象徴し、燃焼した時代人、二条像を暗示したものと知れるのは、作品の完成後である。初めての中世ものを試みる、類例のない宮廷秘話に鉤をうちこむ自身を、中世という枠づけで縛したのである。自制、自戒といつてよい。従来、王朝ものを書いてきた筆者の、みずからそれを払拭、一新する心構えだ。前年度の『とわすがたり』には、いまだ王朝の残像を濃厚にとどめていた。反省していよう。典拠『とはすかたり』の前半部はいたるところで『源氏物語』をなぞり、そこに準拠を求める物語である。王朝懐古、尚古主義は中世を自証する。王朝と地つづきながら、画然たる中世の認識に氏の自覚があった。この意味で、「出家遁世と放浪」への注視は熱い。

實際上、『中世炎上』の構想が、王朝ものを内臓して出発するからである。『煩惱夢幻』と『祇園女御』、当初この作家は両作のプロットを持ちこみ、次いで、移行する作品構想を組んだからである。

『中世炎上』発端の「新枕の女」、「雪から花へ」の二章は全編に冠した序、二条物語の導入部である。原典の次のような断章的なことばを子細に、くまなく吟味して立体的に具象化し、創設したものである。とりわけて精力的に、丹念に描かれている。氏は主人公の不可避の、宿命的な恋愛遍歴を華麗に、苛酷に将来する素地をここに置いて仮構する。二条、のちに三条、幼名阿子あこ（吾子）の生母、後深草帝に仕える大納言典

侍、典侍大と呼びならわされた若い女房、のちに久我大納言雅忠の妻となつて、阿子を生んで早逝した「近子」の物語である。

故大納言典侍あり。その程、夜昼、奉公し候へば、人より勝れて不憫に覚え候ひしかば、いか程もと思ひしに、あへなく亡せ候ひし形見には、如何にもと申し置き候ひしに、領掌申しき。(巻二)

我が新枕は故典侍大にしも習ひたりしかば、とにかくに人知れず覚えしを、言ふかひなき程の心地して、よろづ世の中つ、ましくて明け暮れし程に、冬忠、雅忠などに主づかれて、暇をこそ人悪く伺ひしか。腹の中にありし折も、心許なく、いつかくと、手の中なりしよりさばかりつけてありし。(巻三)

もちろん、杉本氏も着目している。これも序章、「琵琶をひく少女」中に扱う。直截な「新枕の女」とは、何んと対蹠点にあることか。御所伝世の名器「破竹」の下賜をめぐって、日ごろ、願ひ出していた実兼をさしおき、二条に与えてしまう根拠とするのだ。院は、同じく二条に興味を寄せる実兼を牽制し、絶対の優位を「大納言ノ典侍局」とのゆかりに置く。養育してくれた、新枕のことを教えてくれた人、その恩人に報いるために二条をいつくしみ、琵琶も下賜するという。横広がりの、複雑精緻な仮構だ。「断絃」の章に照応するだけではない。若い日の院と実兼との懇親、角逐を物語るひとこまは、全編のすみずみに波及する。

瀬戸内氏の「新枕の女」は一貫して、その掛け替えのなさを追求する仮構だ。近子は、後深草の幼帝と生死の危難をともし救出し、性生活を開き、動かして行く。最終章「煩惱無限」にまで垂直に連絡している。

垂死の院は、実兼の手引きで見舞に訪れた尼僧の二条を相手に、新枕の夜を再現する。「す…け…だ…い」と声をあげて。

権大納言四条隆親の女、近子は幼くて生母に死別し、叔母の婚家、太政大臣西園寺実氏(実兼の祖父)のもとに引きとられて育つ。その後見で、猶子になつて宮中に出仕する。近子が十四歳、後深草帝五歳(前年に即位、父御嵯峨院が院政を摂る)の時から九年間である。側仕えのすけだいが添寝をしなければ眠られぬ幼帝は、「お小さい腰萎え」の立居もままならぬ不自由な身体であつた。二年後の春のこと、内裏が大火に遭い、燃えさかる火煙の中を近子ひとり、幼帝を守つて逃げまどう。無理やりに腕を引くよりない危急に際して、不思議にも、幼帝は腰を伸ばし、両足で大地を踏んで立ち上がることが出来たのである。

これは、氏の『増鏡』上「第五内野の雪」の一節を採用した仮構である。原典に近子が登場するはずもない。

あくる年は建長五年なり。正月三日御門(注、後深草帝)御冠し給ぬ。御年十一、御いみな久仁と申。いとあてにをはしませど、あまりさ、やかにて、又御腰などのあやくわたらせ給ぞ、口惜しかりける。いはけなかりし御ほどは、なをいとあさましくおはしましけるを、閑院の内裏焼けたる(注、宝治三年二月一日に焼亡)まぎれより、うるはしく立たせ給たりければ、内の焼けたるあさましさはなにならず、この御腰の直りたる喜びをのみぞ、上下思しける。(『日

本古典文学大系87神皇正統記 増鏡』昭四〇・二一・五刊 岩波)

帝の信頼も、愛情もこの上ない近子が、宮中を追われ、源雅忠の妻と

なつて去るのは、養家の遠謀による。実氏の女、公子が入内したからである。新枕のことを教え、習ったふたりの情愛が濃まやかになり行くのが危惧されたからである。もとより、近子とて「おふたりの仲が睦まじく、一日も早く女御（注、公子のこと、ただちに立后して中宮）が皇子を御懐妊なされば」、身をひこうと心得てはいた。すけだいは自在に翻弄される。公子、のちの東二条院がことごとくに二条を敵視、妬視して御所追放にまで及ぶのは、母近子以来のものである。二条の宮廷生活は故母のそれをなぞる。

近子は藤原冬忠や雅忠、ときに他の公達たちと交渉を持っていた。若い帝は好奇心をそそられ、尾行し、嫉妬する。近子を責め、自身をも虐む。後年、院がことさら二条の上にもふるう嗜虐、自虐の奇妙な性的習癖はこの時に養われたものであろう。

ところで、近子の「新枕の人」は、実に帝の父、後嵯峨院であった。氏の獨創性もともと發揮される仮構だ。『新とはすがたり』ではそこへ溯らない。またも、養家の遠謀であった。実氏が山荘に後嵯峨院の微行を仰いで、そこへ近子を招き寄せたのである。生母を亡くした、猶子とはかくも薄幸なものか。作品は近子と後嵯峨院・後深草帝、この後深草帝と近子・二条という父子、母子の二代にわたる、複雑にからみ合った関係を物語る。重層化されて頽廢、紊亂はきわみに達しよう。原典に描かれた後深草院とすけだひ、二条母子との関係、さらに二条の後深草院の兄弟へと広がる交渉を導く序章にしたに違いない。近子の後嵯峨院「新枕の人」設定は、二条の負った宿業のむごさに向けて、氏の透徹し

た『とはすかたり』解釈、解明を示す。杉本氏の「上層階級の性の紊亂は、この時代に限りません」という、一般論で律せられぬものを探りあてたのである。もつとも、氏の論旨はそこになく、「相手の女性の側がその実態を文字に書きとめた例は珍らしく」にかけている。

愛欲作家の性の深淵をのぞき見、歴史作家の資料を静観する両氏の相違だ。『中世炎上』の、前代を継承した新次代の物語、母から子へという構想はここにも如実に現われている。

後深草帝は「新枕の女」を失ない、うつうつとして誰も近づけぬ。西園寺家では中宮公子の懐妊を待ちわび、焦慮にかられている。今度はおらったのは、後嵯峨院である。別荘に帝と公子を招待し、蹴鞠を催す。

「新枕の人」はひそかに召し寄せた近子を男装の仕丁姿にやつさせ、植込みの蔭に伏せておく。好餌をまいて帝を釣ったのである。近子を使って、帝を公子のもとに向わせる。またしても、近子は利用され、翻弄にまかせるよりない。帝は「新枕の女」に再会し、交情が復活する。遺児二条の男性遍歴といいながら、翻弄される性も故母のものである。

源雅忠の妻、近子は女子を産み、帝に託して死んでいく。帝が死の床を訪れる、最期の逢う瀬は哀切を極めていよう。「略」この世の名残りに……これで命をちぢめても思い残すことはありません。この場面の仮構を、氏はどこから持ち来たったのであろうか。『和泉式部歌集』下の次の歌を具象化したに違いない。『煩惱夢幻』の作者は式部に、近子にいまわの願いをかなえ、贈ったのだ。

753 あらざらんこの世の外の思ひいでに今ひとたびの逢ふこともがな



わが子二条の生を開いて、近子はみずからの時代を閉ざして早逝する。宿命的な二条は敷かれた軌道を歩む。敷かれぬ中世をも生きるのである。

ひとつ付記すれば、前掲の『花に問え』の主人公「美緒」も、故母の愛人と交渉を持つ。亮介は母子に通じたのである。不倫、淫蕩の所業を犯したふたりは一遍上人に惹かれる。亮介の死後、美緒は四国をひとり旅の途次「風早智信」と名乗る巡礼の青年僧と知り合う。「出家遁世と放浪」の一遍智真を寓していよう。げんに、所持する系図によると、一遍ゆかりの子孫である。美緒はますます一遍の世界に浸りこむ。作品の末尾は亮介の願いを継いで、美緒が「出家遁世と放浪」を決意し、「生きながら無限の自在と自由」を手に入れる、と結ぶ。いまだ、氏の中に『とはすかたり』は存続して、往年の『中世炎上』に総決算をつけたのである。そういうえば、あの「作者のことば」に「一遍上人絵伝」が明記されてあった。

中世を生きる阿子、二条の独自性は「出家遁世と放浪」にあこがれ、それを仕遂げるところにある。不断の自己検索、凝視によってそれが誤りないもの、不動のものと確かめて実現する。

『とはすかたり』は開巻、二条は十四歳で登場する。後深草院のもとで琵琶などの手ほどきを受けて成人したのである。『中世炎上』第三章「初鶯」も原典に即して文永八（一二七〇）年元旦に始まる。故母すけ大の宮中出仕「十四歳」仮構のよりどころと知れよう。近子の生に合わせ出発し、主人公の特異性をクローズアップしようという意図である。杉本氏は「九ツか十ぐらい」の少女時代の一挿話、琵琶「破竹」をみご

とに弾奏する阿子を仮構して、伏線を張る。瀬戸内氏の二条像に、解釈をほどこした仮構は不要らしい。原典をなぞり、要衝を固めれば充分とするようだ。氏自身が二条と重なる同行者だからである。

何よりも、二条は、自意識の勝った女性として鮮烈に印象づけられる。院のわたくし物に育って、誇り高く、驕慢ではあるだろう。まさに、『新とはすがたり』の二条造型がこれである。自意識の強さは、ことわりなしに仕組まれた初夜を院にあらがい通したことで示される。寝室で、君寵を拒む全身像を現す。父も、継母も、召使いたち、誰れもそれと心得て、院の御幸を迎える準備をととのえる実家内で、ひとり圏外に置かれた当事者である。得心がいかぬという。原典に「さらば、などやか、るべきとぞ承りて、大納言をもよく見せさせ給はざりける」とあるのが、補強、拡大される。盾にとるべき父久我大納言を捨象し、単身もって椿事態に対処する女性に描く。

「そんな、みんなが相談していたことなら、どうして一言前もって私に話して下さいさらないのです。もう子供ではないからおっしゃりながら、こんな不意打ちのことをして、まったくの子供扱いしていらっしゃるではありませんか」

なじり、泣きわめき、院のつけ入る隙を与えない。思いがけない反撃ではある。『源氏物語』の、藤壺に満たされぬ思いを、姪の若紫に遂げる光源氏に模していよう。が、「すけだい」ともらして迫る院はパロディ化されてしまう。痛烈だ。二条は若紫ではなかった。

それは二条にとって寵幸ではない。「大納言」は恩寵としたゆえ消去

される。一体、あの拒絶は何を意味するのか。理不尽にも、襲い来たつた院への反応ではある。実兼の存在も作用している。が、納まるまい。ういういしい人生の門出に遭遇した事件は象徴性を持つ。今後も、それにさらされるといふ人生の予兆を感得したのかも知れぬ。作中、いたるところに予知夢が語られ、ことごとく現実化する記述があるのも、二条の触覚が将来するものへ鋭敏に、不安に向いている証左だ。

しかし、次の夜は暴力に屈する。受け入れざるをえない。二条の「新枕の人」は後深草院である。もちろん、初恋の人実兼との交信は続いている。二条の恋が公私、表裏の二重性をそなえて始まる点が留意されよう。杉本氏は二条をめぐる院と実兼との暗闘とし、暴力的なのは後嵯峨院の院政のもと、わが子熙仁親王を押しつけて、龜山帝の子世仁（のちに後宇多帝）の立場をあえてしたことへの憤懣、激情のあらわれと解して作品化する。従って、後朝の別れなど描かない。

翌朝、きぬぎぬの別れは促されたとはいえ、院の「さくらもよぎの甘の御衣せに、薄色の御衣、固紋かたもんの御指貫、いつよりも目とまる心地せしも、誰がならはしにかとおぼつかなくこそ」とある。二条の自意識は少しも曇らされていない。内心に滲出したものを検出している。瀬戸内氏も、「それがいつもより目にしみつような気がして、何となくなつかしく美しく眺められるのが阿子にも不思議であった。（略）男女の仲というのは、一度あはしたことがあると、こうもたちまち気持が変ってくるのだろうか」と。二条は故母以来の、翻弄される性の運命を受け入れたのである、自覚的に。

「雪の曙」西園寺実兼、「有明の月」性助法親王、ともに後朝にちなむ仮名である。「近衛大殿」鷹司兼平、龜山院などとの交渉も突如として訪れ、それぞれのきぬぎぬを惜しんでやまない。二条のパターンである。当然、これかれ錯雑し、引き裂かれる自意識だ。

なれ行けば、帰る朝は名残を慕ひて、又寐の床に涙を流し、待つ宵には、更け行く鐘に音を添へて、待ちつけて後は、又世にや聞えんと苦しみ、里に侍る折は、君の御面影を恋ひ、傍に侍る折は、又他所よに積る夜な〜を恨み、我が身に疎くなりました事悲しむ。人間の習ひ、苦しくてのみ明け暮る、（巻一）

ひとりひとりに熱く恋着し、訪れを待ちわび、安堵し、疑い、嫉妬し、浮き名の立つのをおそれる。宮内の人間関係にも心をくだかねばならぬ。翻弄された性が自意識をさいなむ。安息や統一をはばむ。ますます研ぎ澄まします。きわどい設定を構えた愛欲描写に、忘我の、永遠の、甘美な陶酔感は薄い。荒廃感のみ強い。さらに、あの多産な健康な肉体の自然が、痩せ細った精神を裏切る。不安定な崩壊寸前の二条を救うのはみずから現状の打破、脱出のほかにはない。

そういえば、二条は頻繁に居所を移動している。つねの住居とするのは院の富小路御所であり、里下りする父の河崎の邸ではある。この二点を中心に洛中、洛外を、醍醐、石清水八幡宮、伏見などにまで二十ヶ所余りを数えることができる。後深草、龜山両院の随行に、出産に、恋人たちとの忍び逢いに、参籠に、人さわがせな失踪事件も再三おこしている。二条は外出に駆られていよう。

二条の「出家遁世と放浪」へのあこがれは、右の自照的な文章に続いて、初めて告白される。十七歳の述懐である。「ただ恩愛の境界を別れて、仏弟子となりなん」。仏縁を結んだのだ。思えば、九歳の時にか、「西行が修行の記といふ絵」を見て、「羨しく、難行苦行は叶はずとも、我も世を棄てて、足に委せて行きつゝ、花の本、露の情をも慕ひ、紅葉の秋の散る恨みをも述べて、かゝる修行の記を書き誌して、亡からん後の形見にもせばや」（巻二）という。道心のきざした機縁を尋ねて上限をきわめ、その篤さを確かめる。出離、放浪に決定的、具体的な事由を立てない。たとえば、両親やわが子の死、多くの男性遍歴、性助法親王の急死、女楽で蒙った恥辱、醜聞、東二条院の使嫉による御所追放など、現世の絆を断つ動機になりえよう。ほとんど、巻二、三に語られる後続のことごとである。われと悟った時が縁起だ。以降、憂き世を厭う心を養い、それを潜めて持す。二条の旅寐、里居の頻発が女西行の代償行為であり、延長線上に、三十一歳の得度、出離がある。

「西行が修行の記といふ絵」は『放浪について』の筆者に、自身の「こどものころ、西行の生涯を絵本で見たとき」を想起させ、かつて抱いた「ショック」や嫌悪感を改めたに違いない。出離へのひたすらな態度が了承できたのである。この部分も採って、「あの幼い時、なぜそんな発心が湧いたのか」と二条をして言わせている。随所に女西行へのあこがれを語って、漸層的に、作内に貫流する。「どれほど男たちに愛されても誓われても」、それはいったんの惑溺に過ぎず、「心の底からぬぐいきれない不安や淋しさ」が残る。氏の二条も、女西行にその事由を特

定することはできない。窮地にあつて挙に出たわけではない。そのはずである。自筆の『解説（十二）』で、

これを書いていた頃から、次第に私の出家への憧れは強くなったが、書き終り、本になった頃は、ほとんど私の覚悟は決つてしまつた。誰にも打ちあけないその頃の私ひとりの秘密であつた。

多年『とはすかたり』に親しんで来て、いわば、最終の『中世炎上』執筆の段階にいたつてゐる。氏は二条と一心同体で同行して来た。目睫の間に迫つた得度、出離が「自分としては内的欲求の自然の波に従つたもの」というゆえんだ。

だから、氏は二条の得度、剃髪までを明確に作品化しなければなるまい。原典では巻三の末尾に、北山の准后（故西園寺実氏の室）の九十歳賀宴に招かれた二条を描いて、上臈の姿をかき消す。『中世炎上』の「秋風」の章に二条、改称して三条の出離を創造している。その直前に、『増鏡』下「第十一さしぐし」の一節を利して、宮廷人最後の姿とする。山岸氏の『とはすかたり覚書』以来、巻三と四との空白期をわずかに埋める資料として知られる。

『増鏡』中「第九草枕」、「第十老いのなみ」にも『とはすかたり』の記述と重なる部分がある。二条を指して「なにがしの大納言の女、御身近く召し使ふ人」（『第九草枕』）、「上臈だつ久我の大おとどの孫」と記され、准后九十賀で連歌の付句を「誰にかあらん、女房の中より」（いずれも「第十老のなみ」）詠進した者である。次の「第十一さしぐし」で余儀なくした三条の呼称に冷遇、零落を読み取るべきか。——後深草院が

二条に手引きを命じて斎宮愷子（後深草院の異母妹）に逢う話（巻二）は「第九草枕」に取られている。氏は『とはすかたり』に語られず、「第九草枕」に記述される斎宮愷子と実兼、二条師忠との情事を採って「春おぼる」の章に作品化する。「第十一さしぐし」に、

二 車、左 久我大納言雅忠の女、三条とつき給ふを、いとから  
い事に歎き給へど、皆人先だちてつき給へれば、あきたるまゝとぞ  
慰められ給ける。

正応元（一二八八）年六月二日、西園寺実兼の長女鐘子（のちの永福門院）が伏見帝（父後深草院の院政時）の後宮に入内する盛儀に際して出仕しているのだ。作中では、実兼から「大姫の入内の時の女房たちの総もとじめ」役を依頼され、また、八月二十日の「立後の儀式」にも勤めている。その一ヶ月余りの後に、二条は念願の出離を遂げる。

これまでも幾度も願い出たが、まだ迷いたらないといって許してくれなかつた聖が、今度ばかりは、二条が訪れると、何もいゝ、ださない前に、聖の方から切りだしてくれたのだ。

啐啄同時の機微を描く。こよなく美しい。剪り落とした黒髪は実兼のもとに送り届けられる。

——氏は二条出離を、鐘子皇后に仕えて内裏に「格式のある局」をえ、誠実な実兼を通わせる、かつてない安定、円満充足、浄福のときに置く。前掲、「他人の目には何の不自由もなく、時を得顔」のときに定める。実は出離を形而下にはかれぬ、内面化をほどこしたのである。

自叙伝『人が好き「私の履歴書」』（平四・七・二四刊 日本経済新聞社）

によれば、氏は最初、遠藤周作氏に受洗を申し出て、「神父さま」を紹介してもらったという。キリスト教になじんでいたようだ。父三谷（旧姓）豊吉は神仏具商を営むが、幼時は教会によく通い、小学六年生のとき、家族養子に入った祖母瀬戸内いと（父の年の隔った従姉）は神戸で熱心なクリスチャンであった。東京女子大に入学するのも「チャペルの写ったポスター」に惹かれたからである。

それから禅宗、浄土宗、真言宗の「門を叩いたが、縁が得られなかつた」。最後に、今春聴師に申し出ると、「『急ぐんだね』と応じて下さつた。機が熟したのである」と、これまた啐啄であった。昭和四十八年八月下旬のことで、直ちに得度式の日よりも決まる。遠藤氏も、今氏も「理由」はきかないし、「訊かれても答えられない」という。法名寂聴は師僧の一字と、「出離者は寂なり梵音を聴く」のことがら授る。得度、剃髪、着衣、授戒などの儀式から比叡山横川行院の加行体験は、『比叡』に詳しく語られている。また、『わが性と生』（平二・八・二五刊 新潮社）には出離者としての自覚が身についたのは、六十日間の四度加行を満行してからという。完全な寂聴師に再生したのである。氏は氏は心身ともに一変したらしい。その年の暮れに、昭和四十九年十二月二十八日に京都、奥嵯峨の寂庵に入る。

そのころ執筆したのが、『中世炎上』の『解説へ十二』である。「出家してみても、私は『とはすがたり』について、またいたいことが山ほどたまってしまった。出家するということは、してみなければ決してわからない部分がある」という。氏の『とはすかたり』滞留は出離の前後

にまたがる。いま、巻四・五に二条尼の語る「出家遁世と放浪」に理会が開かれる。卒直に傾聴すべきだったという反省もあろう。直接には、自作「途上」、「煩惱無限」の章にほどこした解釈、仮構へのこだわりである。自得が動くのだ。恣意な虚構が悔まれるのか。かつては不明であった。

たとえて挙げれば、次のような仮構であろう。阿闍梨性助法親王、後深草院、実兼、兼平、龜山院の入り混じった、猥りがわしい性夢をみたり、「まだ自分の血の中には、こんな淫らなものが残っていた」、「自分の中の女の魔性」、「院を恨んでいる自分」などと描いた二条尼像が顧みられるのだ。好色、怪奇な「矮人」を創出し、後深草法皇との再会を寤所の床下に忍んで一部始終をうかがい、二条尼を脅迫して、かえって下紐で絞殺される設定などは容認できまい。なかんずく、石清水八幡で再会した僧形のふたりが交情を復活する場面は、

御肌みに召よされたる御小袖を三つ脱はがせおはしまして、「人知れぬ形見ぞ。身を放つなよ」とて賜はせし、(巻四)

を典拠にほどこした仮構ではある。きぬぎぬ(衣々)の古習にのっとり、想像をめぐらせたのである。氏には、われながら歪曲もはなはだしからう。あまつさえ、尼僧の矮人殺害を配したのである。『新とはすがたり』も後深草院の酷薄なことを仮構する。「でも、なりはみすばらしかったぞ。春とはいえ雪もやいのひどく底冷えする日だったから、見かねてな。下に着ていた物を二、三枚ぬいで、めぐんでやったよ。(略)で、二条にも釘をさした。『どう生きようとそなたの勝手ではあるけれど、

御所での事を世間に触れ回るな」とね」。身勝手な暴言とさげすみを甘愛して退下する、出離者の純愛は損なわれぬ。踏みじられぬ。肉体しか求めぬ院を抜いて、二条尼の精神性は気高い。瀬戸内氏も自身が出離して、「はじめて二条の稀有な精神性が見えてきた」(「比叡」)。

ふたつの小説の末尾は、後深草法皇崩御の葬列をひたすら追い求める二条尼、見送る二条尼を描いて好対照である。

ここよりや止る止ると思へども、立ち帰るべき心地もせねば、次第に参るほどに、物は履かず、足は痛くて、やはらづつ行くほどに、皆人には追ひ遅れぬ。(略)空しく帰らんことの悲しさに、泣く泣く一人参るほどに、(巻五)

「悟りました女西行の心の澄み方はいかががえない」と評した一節である。氏は、

足からは血が滲み、爪ははがれ、もう自分のものとも思えないほどはれ上ってしまった。傷口に砂や石ころがめりこみ、歩く度ずきずき、頭の芯に痛みがひびいてくる。それでも足をひきずり、立ちどまり息を整えてはまた歩きます。

未練というはおろか、情炎をあげて、とめどなく愛執を燃やし続ける尼僧を造型したのである。自虐的な疼痛感が保証しよう。

『新とはすがたり』は、

緒を切ったか、追ってくるまに脱げてしまったのか、二条は履物すら失って、横坐りに投げ出した素足が月明かりに白い。左右の手を土に突き、呼吸が苦しいのか肩を激しく上下させながら、それでも

すっかり顔をあげて葬列を見送っている。追うのをあきらめたのだらう。みるまに遠のき、小さくなってゆくその姿へ、

牛車に乗った実兼という、へ見た目のカメランが小さく、遠ざかる対象を映す。二条尼に即して内心の「炎上」を描いたものではない。いちずな追慕に、やがて諦念が浸してくるだらう。実兼の視線は優しい。

「二条どの、あなたは今こそどこか見しらぬ国、見しらぬ地の果てにかかるがると、捨身することができるとのだよ」。

彼我、「煩惱夢幻」と「跡の白露」との章名に寓された対比である。

が、寂聴師も杉本氏と等質な目差しを二条尼に注いでいるだらう。瀬戸内氏は遅参したかに見える。みずから拙速を禁じたのだ。この愛欲作家が血脈の二条と生ま身で交渉し、並列して、肉体から精神へと通行して出離を経て来たからである。こと二条に関して、氏は体験主義を守っている。

『とはすかたり』について「いいたいこと」や、小説でなく「私なりの考証」(『解説』(十二三))をまとめたという。いまだに果されていない。従来通り、拡散して行くようだ。

ようやくにして氏は『とはすかたり』を離れる。『この救われざるもの―かげろふ日記私考』に、『平家物語』(昭五二・一―一二『ミセス』)に、『平家物語』「おもかげの旅」(昭五三・一―一二『ミセス』)にと古典放浪へ旅立ってしまう。

注、『花に問え』は、当年度の「谷崎潤一郎賞」を受賞。なお、平成四年十二月

一日付『読売新聞』朝刊二十三面に「煩惱一途／瀬戸内寂聴さんに聞く」の談話記録を掲載している。